

報告Ⅰ 胡錦濤の政治とSARS政局

(法政大学) 趙 宏偉

Ⅰ. 問題提起

ご紹介いただきました趙宏偉です。早速私の報告を始めさせていただきます。

私の報告のテーマは「胡錦濤の政治とSARS政局」というものです。今日の全体的なテーマは「中国の胡錦濤時代を占う」という大テーマですが、私の話はどうも本当に「占い」になりそうです。暴論をぶつけますが、ひとつよろしく願います。

SARSという話からまず始めなければならないと思います。大まかな流れですが、昨年11月に広東省でSARSという病気が出てきたんですね。それから噂程度で、インターネット上でいろいろ話が出ていたけれども、どうも大事に至っていないようでした。しかし突然3月頃に香港で爆発して抑えきれなくなりました。実はほぼ同じ時期に北京でも爆発したんです。なんとかそれを隠しながら抑えていこうとしていて、4月になると抑えきれなくなりました。仕方なく4月20日に、共産党首脳部は、いわゆる厚生大臣にあたる衛生部長と北京市長をクビにして、それから公に大掛かりにやり始めたんです。今日は5月31日、この2、3日の状況では収まりつつあるという感じです。

この状況で、いわゆる政局という日本語を使うなら、政治において権力が動揺するかもしれないような事態が起こっているんじゃないかということですね。今SARSということの中で、中国では政局が動いているんじゃないかといういろいろ分析や推測が出ています。大まかには2種類の対立した分析です。一つは、胡錦濤にとっては大変な危機

で、それを乗り越えることができるかどうか。この危機の中で江沢民と直接ぶつかるようになってしまい、そのぶつかりは早すぎたのではないか、もう少し胡錦濤が力を蓄えてからならともかく、いまSARSで派手にぶつかってしまった。これは大変な危機だ、これをはたして乗り越えられるか、という分析ですね。もう一つは、「危機」の「危」は「危ない」、「機」は「チャンス」、つまり危機は同時に、危ないからチャンスがある、チャンスだから危ない、胡錦濤にとっては実は悪いことではないのではないか、という分析です。

私は、恐らく政局を左右するもの、政局の裏で結局SARSをめぐっての政策決定をどのように行ってきたのか、政策決定は責任問題に直結するものだが、それはどういうものであるか、考えなければならないと思います。しかし私たち、外の人間は推測しかできません。推測する場合は今までのプロセスを観察して推測するしかないですね。恐らく焦点の1つは、胡錦濤指導部は、初めからSARSの大体の情報を把握していたかどうか、ということです。みんながなんとなく思っている説は、首脳部は状況をしっかり把握していなかった、下から報告してこなかった、特に衛生部長と北京市長、および軍に責任があった、ということです。それから香港では、広東省党委員会書記の張徳江の批判も大変激しく出ているんです。彼が最初に隠したんだから彼をクビにすべきだ、とそういう非難が出ているんです。

ここではつまり胡錦濤指導部はSARSを初めから知っていたか知らなかったか、どこまで知っていたのか、というのが私たちにとっては一つの謎ですね。今までの中国政治についての経験から推

測すると、SARSということは特に北京市の場合、北京市長や衛生部長が党中央首脳部に事実を隠すことは、私の経験からすると不可能です。そんな度胸もない。また北京という場所でもあって隠し切れないと思います。

では、党中央に隠していなかったと判断した場合、それを裏付ける証拠のようなものがあるでしょうか。私の観察では、まず、張文康衛生部長は4月の記者会見の時、意味深なことを言いました。彼は、香港当局は大騒ぎをしているが、SARSというものは騒ぐと封じ込められるようなものではない、大騒ぎはむしろ社会の混乱をもたらし、経済に悪影響を与え、いいやり方ではない、中国は社会の安定、経済の発展を保ちながら一生懸命にやっているのだといった話をしました。つまりその時点で、これは党首脳部の政策決定ではないかと、私は見ているんです。

当時このような政策決定があったとどうして私が見ているか、一つの判断材料があるんです。実は、広東は4月の下旬頃にはSARSを抑え込みつつあったようです。広東では大げさにやっていません。しかし、11月から半年経っていましたがどうもそんなに爆発していない。5月末現在の全体の感染者数も香港と北京よりは少ないです。広東経験はおそらく首脳部にとって一つの経験になっていたのです。首脳部にとって選択肢の一つは大げさにやる、もう一つはある程度秘密にしておいて、しかし結果として同じように抑えこむ。首脳部にとっては、普通に政策コストを考えれば、どっちがいい選択肢になるか、もちろん後者のほうですよね。経済に何の影響もない、社会不安も起らないままにSARSを押さえ込む、そうなければいいなあ、と。しかしここに一つの落とし穴があったんです。つまり、中国は今あまりにもグローバル化している。広東では11月から起こって、ずっと抑えながらどうも大事に至らないようで。しかし、翌年3月に香港で起こって、シンガポール

で起こって、カナダで起こって、台湾で起こって、北京で起こって抑えきれなくなったんです。

さて、誰がこの責任を取るか、ですね。政権側としては、こうなったら誰かに責任を取らせるしかない。で、北京市長と衛生部長が責任を取られたのだと思います。では、二人の罪はなんでしょう。事実を隠したというよりは、これほど酷い感染症であるということに対して認識が足りなかった、ということが罪ではないかということです。実際、中国当局は今日まで2人の罪が情報隠蔽だと発表していません。で、結局認識不足くらいの罪ですから、これ以上の嚴重な処分はないのではないか、と私は見ているんです。

そして、この中で政局に直結する話ですが、皆様ご存知だと思いますが、この衛生部長の張文康という人は江沢民の個人的な医者のような人です。『毛沢東私人医生回憶録』（邦題『毛沢東の私生活』）は日本でも出版されましたが、その江沢民版のような人物です。腹心のようなものですね。で、彼がクビにされた、ということなんです。一方、北京市市長は胡錦濤の共産主義青年団系のエリートです。まあ、自分の所の人も切ったということです。では、これによって江沢民と直接ぶつかるようになったか、あるいは後に胡錦濤政権の危機に発展していくのか、ということですね。それが、今日私が分析しなければならない問題です。

一体どのように見ればいいのか。私はいわゆる何かの秘密情報を入手したとか北京の偉い人たちを知っているとか、それはまずありません。あったとしても、裏付け材料がないのですから私たちの分析には役に立ちません。だからそういう噂とか、私が実は誰かのブレーンだとか、秘密を知っているとか、そういうことより、学術的アプローチをもって分析するしかありません。

一つの視点として、「SARS政局をどう見るべきか」ということは、推測というよりは、中国政治の本流をみるという視点から見るべきだということ

となんです。本流とは何か。中国語的に説明すると「主流」というものです。では、この「主流」とはどういうものか。結局政治の構造に決められているメカニズムというものがあって、このメカニズムはいろいろな動き、政治的な流れをもたらしています。構造によって決められているメカニズムによってもたらされている政治の流れが「主流」,「本流」です。

Ⅱ.「中華本流」の復興の時代——共産党から「中華党」へ

では、中国の政治の本流は今どうなっているのか。この中国の政治の本流は、共産党という党が中華党へ変わり、中国政治が伝統の中華本流というものに戻っているということ、今の時代は「中華本流の復興の時代」だと私は基本的に見ています。

いろいろな資料を持ってきましたが、まず一つは『中国研究月報』5月号、出たばかりのもので、東京大学の代田先生が北京赴任中に書かれた「SARS北京日記」です。リアルに、現場にいて自らの経験を文字にしてくださいました。日本ではこれほどリアルに文字になっているSARSの事実は、最初で最後ではないでしょうか。それから、私が今日お話ししたい「中華本流の復興の時代」というものについて、中国研究所が出している『中国年鑑』2003年版の中に、私は「3つの代表論と中華本流の復興」という論文を書きました。

では、私が言っている中華本流というものはどういうものか。歴史的に見れば、中華の政治の本流、文化の本流、経済の本流、それは実は中国の漢民族を中心としてつくってきた歴史の本流というものなんです。少数民族も参加しました。モンゴル族や女真族は王朝をつくりました。でも基本的には、大きな流れは漢民族を中心とする歴史の本流というもの、その辺りに政治の本流があるということなんです。

今はこの本流が復興しているのです。それを明確に示しているのが、共産党の中華党への変身です。これは2002年11月の第16回党大会で起こったものです。『共産党規約』にある共産党の階級性格という規程は、今まで共産党80年の歴史の中で変わったことはなかったんです。つまり「中国共産党はプロレタリアの先進部隊」というものです。「中国労働者階級の先進部隊」、一時は「先鋒隊」という言い方もしていました。しかし昨年11月の第16回党大会では、「中国共産党は中国労働者階級の先進部隊であり、中国人民、中華民族の先進部隊である」という言葉にいきなり変わったんです。何の前触れもなく。秘密にしていたんだと私は見ているんです。事前に江沢民の「3つの代表思想」は一生懸命宣伝されていました。しかし党の性格を変えるという話は1回も表に出てこなかった。普通の説明では、中国労働者階級の先進部隊という言葉を残しているじゃないか、という説明ですね。しかし、言葉の意味から見てみても、中国人民と中華民族は大きい概念です。中国人民と中華民族の先進部隊である以上、もうその中に中国労働者階級が入っているのですから、中国労働者階級の先進部隊という規定はもう意味がないんです。

党の階級性格の規定を変えるということは、中国共産党の歴史上、あるいは世界の共産主義運動の歴史上で大変重大な意味をもつことなんです。かつてフルシチョフは、ソ連共産党の階級性格について、全民党、言わば全人民の党という言い方を打ち出して、修正主義と批判されました。この「中国人民党」、「中華民族党」という新しい規定は、まさに中国共産党も全民党だ、というものです。

時代がこんなにも変わっているんだから言葉も変えていいじゃないか、という考え方がありますが、中国共産党の一貫したやり方を見てみると、例えば、毛沢東の時代には、労働者階級とは工人、

農民、兵士、この三者だと規定していました。それから鄧小平の時代に入ってから、鄧小平はそれをちょっと修正して、知識人たちも労働者階級だと宣言しました。今回江沢民は企業家、言い換えれば資本家を共産党に入れようということを、第16回党大会前に「3つの代表思想」の宣伝を通して一生懸命主張していました。そういうつもりだろうと、私たちにもはっきり見えていたんですね。では、共産党の階級的な性格との整合性をどのようにはかるのか。私は鄧小平のやり方でいくのではないかと思っていました。「いわゆる企業家たち、資本家たちも労働者階級ではないのか」、「彼らは24時間闘っていて、むしろ普通の労働者より働いているんだ」というふうに説明されるだろうと思っていたのですが、江沢民は敢えてこういうふうに説明しようとしませんでした。「13億の中国人みんな労働者階級だ、だから労働者階級の党はイコール13億中国人民の党、中華民族の党だ」と、こういうふうに説明しようとはしなかったのです。そこには江沢民の強い意志が見えると私はみているんです。彼は共産党を、自分の最後の年、自分が退職する直前に徹底的に変え、階級政党ではない全民党、中華党だとはっきり性格付けするという強い意志を示したのです。

私は偶然ですけれども、ここ2年くらい、江沢民についての本（『1つの中国 1つの台湾——江沢民VS李登輝』講談社）を翻訳という形でやりました。それから今年の3月、胡錦濤の伝記（『胡錦濤 21世紀中国の支配者』NHK出版）を監修という形でやりました。二人の歴史を、生い立ちを勉強したんです。共通しているところは、二人とも、昔の階級分析の視点から見ると、資本家の子どもだということです。

私はレジュメに「安徽省績溪县人である胡錦濤」と書いておきましたが、これは一つの注目点です。これは、胡錦濤が中国共産党総書記に任命された翌日に人民日報に登載されている彼の履歴の1行

目です。しかし、実は胡錦濤は安徽省績溪县人ではありません。彼は、生まれてから4歳までは上海で、育ちは江蘇省の泰州市というところなんです。実家は、中国人の言う実家とはお祖父さんの家ですね、いわゆる「老家」、私の場合は江蘇省ですが、1回しか行ったことはありません。胡錦濤は安徽省績溪县から江蘇省泰州市に移住してきた胡家の5代目です。もう自分は5代目なのに、泰州市出身を認めず、安徽省績溪县出身と言いつけているということです。胡錦濤は出身地にこだわっているのです。それから江沢民は江蘇省の揚州市の出身です。江沢民は本当にその出身です。お祖父さんの代に、安徽省から移民してきたんです。お祖父さんの家は江蘇省揚州市にあります。もし江沢民が「自分の実家は江蘇省じゃない、安徽省だ」と言うのならまだわかるんですね。胡錦濤の場合は全然言えない。李登輝と比較してみました。李は福建省から台湾への移民の5代目なんです。胡錦濤と同じ、5代目です。李登輝さんは「自分は台湾人だ、福建省とは関係ない」と言っています。

胡錦濤はどうしてそんなにこだわっているのか。調べてみたのですが、この彼の安徽省胡家には1600年の歴史があります。そこに先祖代々守ってきた祖廟というものがあるんです。その祖廟は中国の国宝に指定されているほどの素晴らしい文物なんで、中国語で言うと「全国重点文物保护单位」というものです。この家系の偉大な人物には、明代の胡宗憲という人がいて、国防大臣をやり、倭寇を平定したという功績でさらに太子太保という大変高い地位に上りつめていたんです。それから安徽省で明・清の時代でいちばん有名なのは、安徽省の商人、中国の経済を動かしている「徽商」という集団で、そのトップレベルの何人かも全部この胡家です。金がある、金があるから立派な祖廟を作ったんです。その作りはとても立派なので国宝に指定されているんです。それが国宝に指定

された時、胡錦濤は貴州省の省党委員会党書記をやっていたんですが、当時、胡錦濤の恩師である胡耀邦が失脚したばかりで、胡錦濤の地位も不安定な時だったんです。つまり、胡錦濤が偉いから胡家の祖廟は国宝に指定されたというわけではありません。それから、皆さんもご存知の中華民国期の胡適という人です。中国文化の象徴のような大学者ですね。この人も安徽省績溪県の胡家の出身です。さらに胡錦濤はこの績溪県胡家の本家の第48代目なんです。胡錦濤がとても自分の家系にこだわっているのはこのようなわけがあるからです。

次に、レジュメには「似たタイプの政治家である江沢民と胡錦濤」「家譜文化」と書きました。中国では1998年ごろから、この家譜文化というものが大変な盛り上がりを見せているんです。この年江沢民は上海に行って、上海博物館を見学していて、そこで家譜文化について「重要講話」を出したんです。家譜文化というものを大いに発揚しなければならない、民族の結束力や中華振興の精神を高める……、と言いました。実は彼がそこで見学した家譜、メインに置かれている家譜は、胡錦濤家の家譜なんです。こういう二人なんです。二人とも安徽省の出身で、「徽商」の家を出て、江蘇省と上海で生まれ育ち、中華エリートの教育を受けた、そして資本家の子どもなんです。

このような似たタイプの江沢民と胡錦濤を選んだのは鄧小平です。レジュメに「血統論」の3文字を書きましたが、鄧小平という人は大変育ちを重んじている政治家です。一つの例として、彼は改革・開放をやり始めた頃、栄毅仁と王光英、1949年以前に大資本家だった2人を中南海に呼んで、今はこの資本家の仕事、やり方を二人以外に誰も知らない、だから資金を出すから二つの大きい会社を作ってください、目的は全国民に資本家の手本を示すことだ、と言いました。で、当時中国人は結構びっくりしたんです。今はこの二つの

会社は大いに発展し、栄毅仁のあとを受け継いでいる長男は、アメリカのフォーブスが発表した中国での資産家のナンバー1になっています。それから鄧小平は江沢民を後継者に選びました。江沢民は資本家の子どもですね。それから江沢民の後継候補として胡錦濤を選びました。胡錦濤も資本家の子どもです。だからこそやっていける、信頼できると、二人を選んだのではないかと私は思います。

江沢民と胡錦濤はどちらも、特に江沢民ですね、家にお金があるので、日本でいう慶応幼稚舎のようなところからスタートして有名私立小学校、中学校、高校、大学へと、そういうコースでした。胡錦濤も同じです。小学校の時はもうお父さんの商売が没落していたんですが、一族はお金を出しあって当時のお金のかかる有名私立小学校に入れたんです。胡錦濤は頭がいいので後に受験で、全部いわゆる重点中学、重点高校、それから清華大学へとあがっていったわけです。

鄧小平という人は大変血統論を重んじています。血統論という言葉は文化大革命の初期に騒がれた言葉で、当時革命高級幹部の子女たちは「自分たちは血統がいい」と言い、胡錦濤のような資本家の子は血統が悪いと言っていました。しかし、恐らく鄧小平を含めて、江沢民と胡錦濤の側から見ると「キミたちは何だ？ どの馬の骨だ？ 俺たちこそが血統がいいんだ」ということでしょう。「育ち」というものが中国の政治文化の底にあると私は見ているんです。

今振り返ってみると、江沢民は鄧小平から権力を受け継いでから、すぐにも共産党を変えようと企み始めていたことがわかります。私は、98年に東京大学出版会から本を出したんですが、使った資料は97年までです。97年は第15回党大会。私がびっくりしたのは、江沢民はこの第15回党大会の政治報告の中で、共産党の歴史について再説明を行い、今までの共産党史の説明を変えてしまった

ことです。私はこのことを著書に書き入れました。
第15回党大会の時、江沢民はこう宣言したんです。

いわゆる共産党の歴史は、実は中華振興の歴史だ、とまず党史を中華振興史に置き換えてしまい、次にその中華振興の歴史は孫文からだ、と孫文を引っ張り出したんです。ここ100年の歴史を見ると、中華振興の偉大な3人は孫文、毛沢東、鄧小平と褒め称え、そして孫文は初めて中華振興というスローガンを打ち出し、清王朝を倒したと。清王朝は、中国の知識人の伝統的な考え方からすると、本流じゃないんです。孫文は中華の本流を復興させ始めたということなんです。それから毛沢東の功績は何か。社会主義、共産主義をつくったのではなくて、独立して統一している中国をつくったと。それから鄧小平の功績。改革・開放で中華振興の新局面を開いてくれた。こういうふうに評価したんです。では江沢民は何をやりたいか。俺は共産党を変えるんだ、とそういう流れになっているんですね。そういう流れでいくと、5年後の今回の党大会は、党規約には中国共産党は中華党だ、労働者階級の党じゃなくて、中華民族の党だ、と。それから江沢民はまた報告の中で、こういう言葉を述べました。中国共産党はその生まれた日から、「中国人民と中華民族の先進部隊となり、中華民族の偉大な復興というおごそかな使命を担っている」、このように中国共産党の歴史を説明し直したんです。これは改竄ですよ。中国共産党はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想を指導思想にもって、社会主義、共産主義の実現のために奮闘してきたんです。江沢民以前、公式的な中国共産党史は1919年の五四運動を始まりとし、五四運動の時、マルクス・レーニン主義が中国に入ってきて、後に共産党革命が始まった、と。江沢民は党史を中華振興史に置き換え、孫文の辛亥革命から始まるといい、孫文を革命の祖としたんです。こういう彼の意識は中国共産党としての意

識より、中華としての意識が大変強いと私は見ているんです。

Ⅲ.「エリート政治の再構築——1億エリートの民主主義へ」

レジュメに「エリート政治の再構築——1億エリートの民主主義へ」と書きましたが、これは胡錦濤が江沢民のものを受け継いだ上で作り上げようとするものだろうと、私は分析しているんです。これは第16回党大会の時に打ち出された、いわゆる政治改革について中身を示しているものじゃないかと思っています。

一つは、第16回党大会の中で政治理念として「政治文明」という言葉が新しく出てきたんです。今まで中国共産党は精神文明と物質文明、この二つの文明の建設を行うといってきました。江沢民の13年間の中でも二つの文明、精神文明と物質文明の建設というスローガンを言い続けてきたんですが、第16回党大会はいきなり「政治文明の建設」という言葉を打ち出してきたんです。この言葉は何も前触れが無く、大会報告にいきなり打ち出されました。だから私の推測では、胡錦濤の主張ではないか、もちろん江沢民は大賛成で、そうだと政治文明だ、政治改革の理念と目的は政治文明をつくることだ、ということです。

では文明という言葉の意味は何か。文明というのは中国では民主主義を意味するものではない。野蛮の対極にある言葉ですね。野蛮の対極としての政治文明です。伝統的な中国の政治文明というのは、実際はエリート政治の文明なんです。わけわからないやつが政治をやって混乱をもたらすと、それは野蛮だと。科挙を勝ち抜いた大知識人たちが政治をやるんだ、私たちが文明的だと、そういうエリート政治の再構築をもって中華の政治文明を復興させようとしているのではないかと私は見ているんです。

この第16回党大会で、「政治文明の建設」とい

う政治理念の下で並べられた政治改革の具体的な内容を見てみると、『中国年鑑』2003年版の中の文章にはわりと詳しくまとめましたが、1つめは、直接選挙という民主主義は村、社区（町内会）、企業という末端レベルに限るんだということです。直接選挙を郷と鎮のレベルにまで拡大するという言葉は、第16回党大会の文献の中にはありませんでした。しかし、現実を見ると確かにやっています。一つ事例としては、四川省では30%の郷と鎮はいわゆる直接選挙で郷長、鎮長及び党委員会書記を選んでいるということです。だからこのレベルまでは直接選挙をやるだろうということです。

それと二つ目は、権力の分立です。これはどういうことを意味しているかということ、「革命党から執政党への転換」でしょう。この文句は中国の文献の中にはよく出てくるんです。かつての革命党ではなく、私たちは今執政党だ、という言い方です。執政党とは何か。与党ですね。与党という形で政治を進めていこうという構想が出ているということです。その一つの裏付けとして、中国の省レベルの党委員会書記は、基本的に省レベルの議会の議長、つまり省レベルの人民代表大会主任を兼任するということになっているんです。中国の新華通信社から出ている週刊誌『瞭望』の2003年3月第1週の号ではっきりと解説されているんです。今、省レベルの行政区は31ありますが、その中で23くらいの行政区の党委員会書記はすでに人代の主任を兼任しているんです。では残りはどうして兼任していないか、ある中国の研究者に聞いたところ彼の答えは、政治局委員を兼務している党委員会書記たちは忙し過ぎるから兼任しないのだ、と。その他はみんな兼任します。つまり原則としては兼任するんです。ではどうして兼任するのか。つまり議会の与党として政治を動かす、そういう形を省のレベルでつくろうという方針が出ているということですね。党委員会書記の人代

主任の兼任は、人代の行政府に対するチェック能力を高めることになり、立法府と行政府の権力分立の度合いを強めることになるだろう。

それからもう一つの隠れた目的があると私は見えています。というのは、今の中国の行政は大変複雑化しているんです。つまり、市場経済化し、例えの一つ取ってみても金融行政、これは大変複雑なもので、WTO行政は大変複雑なものです。行政府は法案をつくって党委員会に出す、党委員会が審査して、党委員会書記が、中央では江沢民だったのですが、決裁をするんです。しかし彼は決裁ができません。大変複雑な専門知識が必要だからです。情報も持っていない、知識ももっていないから決裁はできない。ならどうすればいいのか。江沢民時代で起こっていることは、党中央機関の肥大化です。江沢民は党中央金融工作委员会、党中央企業工作委员会などたくさん党中央工作委员会をつくったんです。何故つくったか。自分だけでは決裁ができないからです。大変複雑かつ専門的な政策決定になっていて、かつて毛沢東の時代のような大まかな政策決定ではなくなっていました。江沢民はたくさんの党中央工作委员会を作り、そこで審議するという方法で対処してきましたが、このやり方は党機関の肥大化、党機関による行政業務の代行といったマイナスをももたらしてきました。ではどうすればいいか。その中で模索して見つけた一つの方法が、省レベル党委員会書記は人代主任を兼任するという方法でした。人民代表大会の常務委員たちは専門職であり、兼任じゃなくなっているのです。それから彼らの多くは各政策分野で経験を積んできた官僚OB、元地方首長、研究者たちです。だから専門知識を持っているんです。人代財政委員会や外交委員会などの各専門委員会の力を借りれば、政府の政策案を審査することができ、党機関の肥大化、党機関による行政業務の代行をもある程度解消することができるというわけです。

それから、この権力の分立の一つの動きは、今年の3月に党中央金融工作委员会と党中央企業工作委员会、この二つの党中央専門委員会を廃止し、その機能を國務院に新設された委員会に移したんですね。これは明らかに党機関の肥大化を解決していく、という動きが出ているということです。

それから3番目は党内民主主義です。党内民主をしっかりと作り上げると、これは新しい動向です。

では、党内民主主義とは何か。簡単に言えば、これは「労心者」の民主主義ですね。孟子曰く、「心を労する者は人を治め、力を労する者は人に治められる」。「労心者」は心を使う者、いわゆる知識人、「労力者」は肉体労働者、つまり労働者階級、中国には伝統的にこの二つの階層があるんです。「労心者階層」と「労力者階層」なんです。

共産党は今エリート党になりつつあります。結局、「党内民主」は言い換えれば、共産党内という内輪のエリート民主主義ではないか、と私は見ているんです。つまり、私たちエリートだけが民主主義をしっかりとやればいい。そういう考え方が中国の伝統文化に由来し、党内民主主義についてのさまざまな措置の裏にあるんじゃないかと思っています。

胡錦濤は総書記になってからはいわゆる「三民主義」を打ち出したといわれているんです。「権力は民のために使う、感情は民に繋がる、利益は民のために図る」という言い方です。それは私からすれば「権民」、「愛民」、最後は「利民」で民に利することなんです。これは「逆三民主義」です。民主主義というものは民から権力を得るということです。しかしこの胡錦濤の言葉の意味から見えるものは、そうじゃなくて、私の権力は民のためにあると。これはすごく中国の伝統的な政治スタイルだと私は見えています。

ではその結果、中国の政治体制はどうなっているのか。1998年に私が出した本の中では、中国の

政治体制は重層集権体制から重層民主主義体制へ、と書いたんです。まさにそういう感じが出てきたかなあと。かつては層をなしている権力集中でしたが、今は層をなしている民主主義ということです。第1に、末端のレベルで直接民主主義をやります。第2に、上にいくと党と立法府の一体化、行政の決定と執行と監督の分立のシステムを作るという独特の権力分立のシステムを構築しますが、民主主義の選挙をやりません。第3に、共産党内部の民主主義を重要視し、党内選挙で幹部を選びます。共産党内部の民主主義は、つまり一種のエリート民主主義です。共産党員は7000万人、資本家を入れると合わせて1億人くらいでしょう。つまり中国の人口の1割ですね。1割、1億人エリートの民主主義です。日本の人口は1億くらいですね。中国で1億人ならまあいいと、中国の「民主主義」を認めてくれればいいと思うんですけれど。

IV. 「中華世界」の再構築——「長兄外交」の展開

中華本流の復興、それからエリート政治の再興、エリート民主主義の構築。では外交の面では何をやっているのか。私は中華本流の復興の一環として中華世界の再構築をやっているのではないかと見ているんです。私は「長兄外交」という言葉を使っています。これはかつての朝貢外交の名残のようなものです。「中国はまだかつての朝貢外交のような強行外交をやっているじゃないか」ということでよく私は聞かれるんですが、朝貢外交というものは強行外交じゃなくてソフト外交ですよと答えてきました。

「中華世界の再構築」という話をするとは結構批判されるんです。日中関係には役に立たないとか。でも私は日中関係に役に立たなければならない責任を負っている職業の従事者ではないし、嫌われるか好まれるかを気にするというサービスの従

業者でもありません。思っている真実を言うことが、研究者としての私の仕事だと思っています。

江沢民は国際関係についての1つの新観念を打ち出したんです。それは「新安全観」というものです。新安全観とは、簡単に説明すれば、共同利益を強調して多種多様な同盟をつくるという考え方です。

新安全観というものがいつ打ち出されたのか、いつ内部で検討されはじめたのか、調べてみましたが、95年頃だろうと。何故95年か。新安全観は銭其琛副総理（当時）の97年のある演説の中で説明されましたが、この演説の中で、この新安全観の一つの成功例として上海ファイブの成功を挙げました。上海ファイブという組織は中国と中央アジアとロシアが一緒につくった組織で、1996年4月にできました。時系列で考えるとおそらく95年辺りからその理念となる新安全観の検討をはじめ、あわせて外交政策の調整を行い、そして1年ほど努力し、初めての成果として上海ファイブが作られたのでしょう。

では、95年は中国政治の中でどういう年なのでしょう。94年の秋に江沢民は鄧小平から全権力を委譲されました。鄧小平が強調していた外交方針は、「不扛旗，不当頭，不对抗，不樹敵」というものです。「不扛旗」はイデオロギーの旗を掲げない、つまり社会主義のための外交をやらないということです。それから「不当頭」はリーダーにならない、「不对抗，不樹敵」は対抗しない、敵を作らない、合わせるとつまり同盟をつくらない、非同盟政策、私の言葉では「中国式孤立主義」です。

しかし、江沢民は94年の秋、鄧小平から全権を委譲されてからすぐに政策の変更を検討し始めたんです。新安全観を打ち出しました。そして外交政策上、まず、上海ファイブの結成を企みはじめました。2003年現在、それは中国、ロシア、中亜4カ国からなる上海協力機構として活動し、その

常設機関は北京に置かれ、中国のロシア大使が、事務局長に任命されました。そこまで同盟をつくってきたのです。また今年、上海協力機構6カ国の合同軍事演習も、中央アジアで行われました。6カ国は全面協力を訴える憲章まで締結し、将来中亜共同体へと発展していくと思われます。

もう一つは、中国は「東亜共同体」をも目指しているのではないかということです。それは、98年から動き始めたと思います。2002年に中国はASEANと「自由貿易枠組協定」を結びました。朱鎔基首相（当時）はその直後に日本と韓国にも参加を呼びかけました。これは東アジアでの動きです。

では、日中関係はどんな状態にあるのでしょうか。今の状態は「政治冷戦と経済囲い込み」という言葉で言い表せると思います。これが現実ではないか。小泉さんはモスクワで今日、5月31日に胡錦濤に会うんですけれども、これから日中の政治冷戦が解ける方向に進むかどうか、私は楽観視していません。政治冷戦は1998年11月の江沢民訪日の失敗から始まったと思います。その直後に、私は江沢民訪日を分析する論文を書き、『東亜』の1999年1月号に発表しました。その訪問は失敗で、中国首脳部は、日本政府が日中関係について熱意がないのではないかという認識を持つようになっているのでは、というのが私の分析です。具体的には「お詫び」の3文字を日中共同宣言に入れるかどうかという1点に、日中は合意できませんでした。この問題の解決が難しいからというより、日本側は解決したくない、未解決の問題の存在をもってこれをカードにして中国と距離を保ちたい、日中関係を前に進ませない、のではないかという認識、つまり日本に対してこういう不信任感を持っているんです。日本政府には熱意がないのだから中国側は片思いをしてもしょうがないと、98年から今日まではずっと日中の政治冷戦の状態が続いています。

V. 江沢民の遺産と胡錦濤の権力

では結びに入りますが、江沢民の「遺産」、という「遺産」を後継者に残したのか。政治的な「遺産」は先ほど詳しく述べましたが、何よりも共産党の階級的な性格を徹底的に変えました。次に経済的な遺産はWTO加盟をはじめ、北京オリンピック、上海万博などを勝ち取り、今後10年間の経済成長の「保証書」を胡錦濤世代に手渡しました。

私は新首脳部人事という江沢民の「遺産」をより重要視しています。新首脳部の3つの特徴を挙げます。1つ目は9人の中共中央政治局常務委員のうち、党総書記兼国家主席胡錦濤、全人代委員長呉邦国、首相温家宝、全国政治協商会議主席賈慶林というトップポストに就任している4人が、60歳前後であるということです。党務担当の李長春もこの年頃ですが、残りの国家副主席曾慶紅、副総理黄菊、党規律検査委員会書記呉官正、党政法書記羅干は今年にそれぞれ64, 65, 65, 68歳です。江沢民のときに70歳定年という制度が作られたことを考えると、トップポストに就任している4人は2期10年を務めることができる年齢です。これは首脳部の安定を保つという共産党の人事原則を体現している人事だといえます。国家のトップポストに付いていない曾慶紅以下4人は1期5年で定年になることになっています。彼らははじめから首脳部の中の脇役に決められたわけです。つまり、江沢民は曾慶紅や黄菊といった側近中の側近を過剰に優遇しているというわけではないんです。2つ目は、上記の胡錦濤首脳部の全メンバーは2期10年をやれば、みな定年退職の年齢になります。つまり、今のメンバーの中に胡錦濤の後継者になりうる人物がいないということです。かつて鄧小平は江沢民を後継者に指名し、さらに49歳の胡錦濤を江沢民の後継候補に指名しました。しかし江沢民は胡錦濤の次を全く指名しなかった。

3つ目は、政治局委員の中でも最年少は55歳で、10年後に65歳になり、さらに2期10年務めることはできません。つまり次世代の共産党総書記は、今の政治局委員からは出られないということです。次の人事は江沢民が全く干渉せず、すべて胡錦濤に任せたということなんですね。

江沢民は日本では極めて不人気です。中国でも極めて不人気です。しかし、冷静にこれらの江沢民の遺産を見てみると、江沢民首脳部は政治的にも経済的にも外交的にも人事的にも胡錦濤に最高の遺産を遺しています。したがって、実は江沢民と胡錦濤は似たタイプの政治家として、同じ中華本流の復興の信念、同じ政治・経済・外交政策をもち、相当密接な関係をつくっているのではないかと、日本人が言う阿吽の呼吸が凄くできているのではないかと、私は見ているんです。まったく矛盾なく胡錦濤は江沢民のやっていることを継承していて、しかも自分のやりたいことでもあり、いまはそれらをさらに発展させようと、党総書記になってすぐ自分のカラーを出し始めていますね。したがって私の見方は、特に今現在言えることは、SARS政局は胡錦濤にとっては大変いいチャンスになりつつあるのではないかとということ、これが私の基本的な考えです。

江沢民政治は鄧小平政治を性格的に転換させたものですが、胡錦濤政治は江沢民政治を継承した上、より明確な形で中華本流の復興を目指しています。近代、現代の中国の政治家たちは、西側の資本主義や民主主義を学んだり、西側の共産主義や社会主義を実践したりしてきましたが、今日、自らの伝統である中華本流に戻りつつあります。西側の諸主義は、中華本流の復興の中で利用されたり、捨てられたりしているのです。